

H27 校内研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 「互いにかかわりあおうとする子ども」に向けて実践を持ち寄って話し合ったことについて

友だちとかかわろうとする意識に欠ける本校の児童に対し、「どうやったらかかわり合うようになるのか？」を考える事は、研究テーマに近づけるためにも必須であったと思う。実践を持ち寄って話し合い、参考にできたことは一つの成果であった。今後も先生方の実践の中で使えるように、別紙にまとめたので、参考にしてほしい。(別紙1)

(2) 教師の出所について

「どこで(ひびき合う)ことをねらうのか」そのために「何を教師側の出所として準備するのか？」をより具体的に考えるということについて、今年一年間重点的に取り組んだ。研究協議の中でも話題に上がっていたし、先生方の実践や反省の中にも、様々な工夫が見られた。準備していても、本時の子どもの様子で準備したもの(発問・教具・切り返し・立ち止まりなど)が思うように使えないこともあったと思うが、これも「子どもの思考に合わせて出したり出さなかったりする」ということを繰り返していく中で、だんだんと上手に出所をつかむことができるようになってくるのではないかと思う。教師の出所に注目できたことは、成果があったと考える。(別紙2)

(3) 子どもの思考を想像しながら創り上げる学年・ブロック検討会

昨年度末のように見解に書いた。「一人でがんばるのではなく、たたき台として自分で作ったものを、学年・ブロック検討で出してもらい、ぜひ、子どもの思考を想像しながらみんなで作り上げていってほしい。三の丸の子どもは職員全員で育てるものであるし、そこで、また、互いに子どもの思考を想像することで、教師側の思考、ねらいに到達させる技能が磨かれていると考える。」その課題を皆さんで意識していただき、いろいろなブロック・学年で、熱心な検討が行われた。同じ单元でも「うちのクラスの子はこう言っているから～」など、具体的な子どもの名前を挙げながら、どういう思考の流れになるのかを細かく検討していた。その熱心な検討は、その他のところにあるように、「充実していた」「本当に勉強になった」などの言葉が見られると同時に、自らの成長を語っている人もおり、本時 1 時間の研究授業もそうであろうが、そこまでのプロセスに「勉強」になるところがあったと思う。これは大きな成果の一つであったと考える。

2 研究の課題

(1) 子ども「見とる」ことについて

教師は一人ひとりの個性があり、授業はその教師と子どもと共に織りなす物であるから、教師がその子の活動をどう見たか、発言をどう捉えたかというみとりが、授業を決定する。「子どもをどう見たか」「それに対して教師や友だちはどうしたか」は、「こうすれば、こうなる」という単純な授業技術をあつという間に超える。それ故に、三の丸小学校は、子どもの様相をもとに研究協議をしてきたし、そうすることで教師一人ひとりの子どもをみとる技量を高めることにつながってきた。

先生がたのアンケートの中に、「子どもをみとる手立てを意識できましたか？」の項目があったが、「もう少し」と答えた方が多かった。また、同時に、「みとりの方法についてもう少しやり方を共有していくと良い」「みとりの方法についてはどんな方法があるのか、もっと学びたい」などの声があがった。これは、どんな研究であっても、教師の資質として向上し続けなければならない部分である。ぜひ取り組んでいきたい。

(2) 研究の日程の調整

研究の日程が10月から12月に集中してしまった。「7月までに各ブロック1本は授業研を」と声をかけたが、やはり、「話す・聞く」のルールを徹底し、「かかわりあおうとする関係づくり」をし、「ひびき合うよう」にするまでの期間を考えると秋以降を授業に設定するのが普通である。研究に対して真摯に取り組んでもらっている証拠である。しかし、しわ寄せは協議や研究授業

を見に行く時間を取る（特に個学の先生方はきついし、主任である私も全部は難しい）のが困難になる。したがって、日程調整を確実にできるように、声をかけたい。

（３）学級経営検討会の大切さと目的を明確に

なぜ、学級経営検討会が必要なのか、必要性和有用性を多くの先生方に理解してもらい、「ひびき合う三の丸の子どもたち」にむけての取り組みを普段からしてもらったり、授業研での見取りに生かしていただいたりした。しかし、まだ学級経営検討会の大切さを伝えきれていない分、有用性を感じられないものになっている部分があると考え。また、その検討の仕方についても、もう少しよりよい検討ができるように、こちら側から詳しい手立ての提示が必要であったので、その部分は改善していきたい。また、次年度は検討会で YP など資料も活用し、よりよくかかわり合える、安心感のある学級作りを目指したい。

（４）推進委員の位置づけ

推進委員の方々は、研究を推進する立場として、学年の皆さんにいろいろと研究の内容についてお知らせしたり、検討の際に大切なことを押さえて進められるようにしたりしてきた。検討の時や紀要を書く時など、学年で上がった疑問や困ったことを吸い上げて、随時研究部で相談するや、検討事項についてあらかじめ学年の意見等を伺うなどの機能にやや欠けていたところがある。今後はそうした役割も自覚し、推進委員の機能をアップさせていく。

（５）実践する教科について

実践する教科について、４月の提案で、「『ひびき合う姿』をどの教科でも実践できていくことが、研究が普段の教育活動に生かされることにつながるので、他の教科・領域でも提案できる」とした。本年度は体育や家庭科でも「ひびき合う姿」を目指した提案授業が行われ、大変価値があった。切実感を持たせにくい、子ども自身の問題になりにくい・・・などの考えから避けてきた教科にも、十分提案の価値があると考えるので、ぜひいろいろな教科に取り組んでもらいたい。特に、国語や高学年の社会・理科も、これまでの実践（HP 参照）の中にも素晴らしい物があつた。ぜひ参考にし、挑戦していったほしい。

また、その際に、教科の特性を知り、より深い教材研究ができるよう、学年やブロックで十分話し合い、情報交換をしていく必要がある。学年で提案授業の教科を統一することは、このような部分で有効であるので、各クラスの子どもの特性や興味関心に差がない学年であれば、そのような方法で研究を進める方法も推進していきたい。

３ 三の丸の研究のこれから（今の研究を礎に）

今後の研究についての部分で、多くの先生方にこの研究を続けていきたいという声をいただいた。三の丸の子に必要な研究であると考えている方、今後の教育政策に関わって大切だと捉えている方、いろいろであるが、この研究のよさが伝わっているのだと考える。三の丸の研究は、「教育の技法」の積み重ねが残っていくものを成果としているのではなく、教師が研究の中で個々に学び続ける存在として位置付き、成果は個の中に返っていくものであるという考えで進められているからこそ、「教師自身が学びとろう」としなければ何も成果のない研究になってしまう。これからの研究が、「よりよいもの」になるためにも、以下の点を加味し、来年度も本研究を継続していく。

- ① 職員ニーズである「見とり」について、研鑽できるような機会を研究の中に設ける
- ② 「三の丸の子の実態」や「国の施策」と本校の研究のつながりを探る。
- ③ 「切実な問題」の言葉についての確認と検討